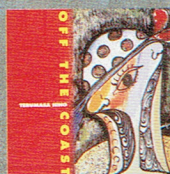


# 日野元彦

M O T O H I K O H I N O

撮影：星野俊



「オフ・ザ・コースト」  
日野皓正  
ティテック  
TECW-28537



「トリップ」  
坂井紅介  
スター・レコード  
STAR-97602



日本を代表するジャズ・ドラマー、音楽家、アーティスト、そんな言葉がピッタリとハマる達人、日野元彦。そんな彼が参加した日野皓正の「オフ・ザ・コースト」と坂井紅介の「トリップ」という2作品の発表を期に、久しぶりに話を聞く機会を得た。ここでは、これらの作品を通しての彼のドラム観、そして音楽観、さらに真のドラマー、真の音楽家とは何かを聞いてみた。ぜひ、実際にこの2枚のアルバムの音を聴き、そして彼の言葉を何度も読み返していただきたい。そして、そこから“何か”を感じ取っていただきたい。

ドラマーの本当の喜びは、アドリブ奏者のバックを完璧にしてあげた時なんだよ

## 日野元彦 TOKO HINO Art Directions

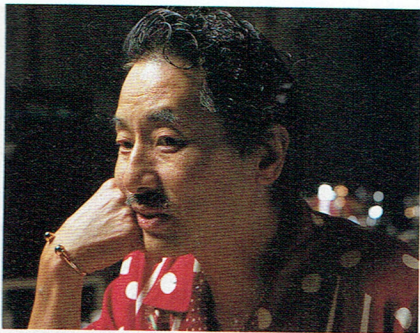
インタビュー中にも語られている通り、日野元彦のリーダー・バンドとして、今後メインで活動していくバンドがArt Directionsである。メンバーは以下の通り。ぜひライブに足を運んで、そのサウンドに触れていただきたい。

Tp：岡崎好郎 As：多田誠司 Ts：川嶋哲郎  
Pf：今泉正明 B：荒巻茂生 D：日野元彦

◆7月14日 新宿 PIT INN ◆7月15日 青山 Body & Soul ◆7月17日 六本木 Alfie

●問い合わせ/藝鼓 ☎03-3753-6684





## 音楽とは何かと思うようになれば 少しずつわかってくることがある

●まず日野皓正さんのアルバム『オフ・ザ・コースト』ですが、レコーディングされたのはいつ頃ですか？

日野 今年の2月1日にアメリカへ出発して、4日、5日、6日、7日と4日間あったんだけど、3日で終わっちゃった。それもやる前にすごくノビリしてて、それでやってみたら全部テイク1だから。だからどの日も昼の12時に始めて、午後3時ぐらいにはスタジオを出てたね。みんなで“今日もやることないねえ”なんて言いながら(笑)。

●今回はマイケル・カービンとアンドリュー・シリアルとのツイン・ドラムまたはトリプル・ドラムという形での参加で、ドラムもそうですが、全体としてジャズの枠を超えた、すごく自由な雰囲気が出ていますね。

日野 そうね。一般的に言うフリーじゃなくて、もっと本当の意味の自由というかね。それだけにコンセプト、そして各ミュージシャンの才能によって決まるわけだからね。

●あらかじめコンセプトのようなものはあったんですか？

日野 僕の気持ちとしては、“この曲は韓国のイメージ”、“この曲は沖縄のイメージ”、“この曲は中国のイメージ”、あとストレートな4ビートの曲なんかだと“日常”とか、そういうふうには“東洋”を表現したかった。おそらく兄のコンセプトも同じだと思うよ。

●今回のツイン・ドラムやトリプル・ドラムはすごく即興的要素を強く感じんですが、それでいて各人のプレイ自体はすごく計算されているようでもあります。ドラマー間では、どのような打ち合わせをしたんですか？

日野 なんにもない。3人ドラムの場合で言えば、僕がセンターにいて誘導していくんだけど、彼らに“僕の叩くおまかなイメージはこのようなりズムが基になってるんだよ”って2人に伝えただけ。それで軽くテーマだけを練習して、すぐ“ローリング！”って言って、録ったテイク1が収められているんだ。すべてそう。唯一テイク2まで録ったのは、アルバムの1曲目と最後の曲。これはどっちかがテイク1でどっちかがテイク2。どっちも素晴らしいんで両方入れたんだと思うよ。

●ドラム間の駆け引きは、日野さんがリードしてるんですか？

日野 うん、全部僕がリードしてる。でもみんな素晴らしいミュージシャンだからね。“僕がこう叩いたら、俺はこういうふうで作ろう、俺はこう作る”って、それぞれ自分の主張をバンッと入れて

るよね。でも日本でこれをやろうとすると“これをやったらまずいかな”とか金魚の糞みたくなくてきちゃう。でもこれは素晴らしいからね。

●互いの相性という意味では？

日野 もう最高だったよね。普通、アメリカのミュージシャンって考えると、こんなにうまくいくはずがないんだ。みんな俺が俺がになっちゃって。でも今回はみんなあんなにすごいミュージシャンなのに1つもエゴがなかった。全員が兄貴の音楽のために、そして僕のドラムを中心にして1つになってくれたんだ。もう1曲終わるごとに“イエーイ！ トコーッ！”で抱き合ってたね(笑)。

●それもテイク1で。

日野 そう。だからほとんど即興だよ。テーマだけは練習したけど、そのテーマだって即興的な要素が強いね。

●そういう形でも曲にしてしまうのは、以前日野さんが言っていた、“ドラムでコード感を出す”ということとも関連しているんでしょうか？

日野 普通、ドラマーって叩くだけの人が多いでしょ？ 叩けば鳴る。だからいろんなサウンドが出ることもわからないで、同じような場所を同じようにただブツ叩くって人が多いよね。そこをまず超えなきゃいけない。超えるってことは、何でも叩けないと。そうしないと脳も、音楽的に深く入ろうという気持ちも起きない。そして叩けた時に、今初めて音楽家の一步を踏み出したんだって謙虚な気持ちになれば、音楽とは何ぞやと思うようになれば、少しずつわかってくることじゃないかな。それまでは何を言われても、わからないよね。たとえばタムを1個叩いた時に、セット全体のハーモニーも“ウーンッ”で出てくることすらわからないと思うよ。

## 歌を忘れたカナリヤじゃなく 歌をさえずるカナリヤでいたい

●次に坂井紅介さんの初リーダー・アルバム『トリップ』ですが。

日野 素晴らしいアルバムだね。歌があって、メロディがあって、やさしさがあって、力強さがある。ペースだけがわるわけじゃない、本当に音楽としてのいいアルバムを作れたと思う。だから、“僕のレコードにしたかったな”って言ったの。

●特に日野さんと紅介さんのダイナミクスでの駆け引きはものすごくいいですね。

日野 もう紅ちゃんとも長いよね。もう10年ぐらいいっしょにやってる。その10年間の間に、“ああ、こういうことが見つかった、これでちょっとはうまくなるかな”、紅ちゃんも“今トコちゃん言ったこと、いい参考になったな、俺もうまくできそう”なんていうことが、何度もあったし、今でもあるんだ。“音楽ってこうだよ”とか“もっとこういう演奏をしなくちゃいけない”とかね。

●このアルバムのレコーディングはプライベート・スタジオで、しかも演奏者が1階と2階に分かれて演奏したとか？

日野 本当はみんな一緒にやるのがいいんだけど、でもそんなことは全然感じないでしょ？ リットするのでも、このメロディだったらこう歌うんじゃないかって、全員が考えているから、相手が見えなくてもピタッとできるんだよね。

●たとえば「Salaam」(アフリカの平和を歌った

曲)という曲なんかでは、全員の感情表現がすごいですよ。

日野 感情が入らないで叩いた時のむなしさ——“俺って音楽家かな？ 俺は最低だな、もう音楽なんてやめた方がいいな”って思うよ。だから、必ずどんな曲でも感情は入れている。いつも！ これができない人は音楽をやめた方がいいね。でも入ってない人がいっぱいいると思うけど(笑)。

●「Trip」のドラム・ソロなんかまさに感情の表れですね？

日野 そう。僕はただドコドコやるようなことはやりたくないの。それじゃ能力がないじゃない？ メロディを作らなきゃ。僕は歌を歌いたい。歌を忘れたカナリヤじゃなくて、歌をさえずるカナリヤでいたいと思うわけ。僕もまだうまくできないけど、一生それを追求していきたい。手数の洪水のような中でも大きい柱の歌が感じられるように、また音数が少なくても間と音程でメロディを表現できるようにって考えてる。でも考えてるって言うてもやる時は“無”なんだだけね。だからドラマーってドラム・ソロがうまくできるからいいってことじゃないんだよね。ドラマーの本当の喜びって言うのは、アドリブ奏者のバックを完璧にしてあげた時なの。素晴らしい主役に最高の演出とアプローチをしてあげられた時に1日終わった満足感が得られる。ドラム・ソロをドコドコやったから満足なんだって言うのは、まだアオイ。だからドラム・ソロなんてできなくていい。いいアプローチができる人が偉大な音楽家なんだ。そこがドラマーの命なんだよ。

●それでは、最後に日野さんの最新リーダー・バンドである、Art Directionsについてお聞きしたいのですが。

日野 去年からそういうのを考えてて、今年になって始めたんだ。これからこれを残していきたいなと思ってる。

●三管という編成にしたアイディアは？

日野 全部僕。誰の知恵もない。メンバーも若手のこれから伸びていく人たちとやりたいと思ってる。その中でも芯のあるヤツとね。今は亡きアート・ブレイキーがそうだったようにね。アート・ブレイキーって若手を育てるのがうまいよね。それで彼らの曲を演奏して……、そういうことを死ぬまでやってきた。アメリカのミュージシャンはアート・ブレイキーのバンドにみんな入りたいと思う。そういうことを、偉そうにじゃなく、僕も年をとってきたから(笑)、みんなのためになって、もちろん僕ももっと勉強しなくちゃいけないっていう気持ちでやりたいね。だから全部オリジナル。まあ、今年あたりどこかでレコーディングしようかなと思ってるんだ。

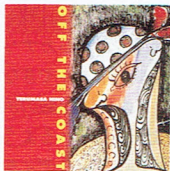




達人のプレイに迫る!  
ANALYSIS of TOKO HINO

# 日野元彦 演奏分析

ここでは日野皓正『オフ・ザ・コースト』、坂井紅介『トリップ』から  
日野元彦のドラム・プレイを解析してみる。  
音と照らし合わせて聴くもよし! 完全コピーを試みるもよし!  
採譜・解説/菅沼道昭 (PARADOX)



『オフ・ザ・コースト』  
日野皓正

本アルバム『オフ・ザ・コースト』は、リズム楽器を重視した作りになっていて、ドラムは日野さんの他にマイケル・カービン、アンドリュー・シビル(1曲のみ)が参加している。大半の曲は彼とマイケルのツイン・ドラムで構成されている。

マイケル・カービンはアルバム・クレジットでは、Drums, Voiceと書かれているので、左チャンネル側で、時折り何か叫んでいるのがマイケルで、右チャンネルの多少ハイ・ピッチなスネアの音の方が日野さんであろう。トリプル・ドラムの場合彼はセンターに位置している。ツイン・ドラムでは、ちょうど70年代初めのマイルス・バンドのようにポリリズムを意識したコンビネーションが中心になっているが、マイケルがわりとリズム・キープにまわり、日野さんが自由に叩きまくるといった場面が多いように思う。またチャイナ・シンバル(音がベンドする)やハイ・ピッチなタムの



音が印象的で、アジアを中心とするエスニックなリズムの要素を強く打ち出しているのもこのアルバムの特徴。ツイン・ドラムでは、2人で1つのリズムとなっているので彼のプレイだけを分析するのは難しいが、その特徴的な部分だけに焦点を当てて見ていくことにしよう。

## M③ GATE ゲート

Music by Terumasa Hino

Ex-1

Ex-1は3曲目「ゲート」での4ビートのプレイの一部で、テーマ後のトランペット・ソロの始



めの部分。ここではツイン・ドラムのフリーのインタープレイから日野さんだけ抜き出して、ストレートな4ビートに移る部分で、マイケル・カービンは叩いていない。わりとスピード感のあるテンポの4ビートだが、非常にリラックスした感じで、繊細なタッチのスティック・ワークが気持ちいい。譜を見てもわかるように、そのフレーズやコンビネーションは実に多彩で、シンコペーション

やタムの入れ方などは絶妙である。5〜8小節目でのハイハットの踏み方、10〜14小節目での小節を越えたシンコペーションのアプローチ、15〜21小節目でのタムの入れ方などが、この部分で注目すべきところだろう。そして何より重要なことは、これらすべてのフレーズが常に歌っているということ、当然トランペット・ソロに呼応していることは言うまでもない。

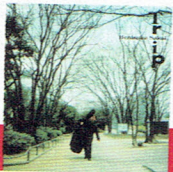
## M⑥ BIG FOOT ビッグ・フット Music by Terumasa Hino

Ex-2は6曲目「ビッグ・フット」でのプレイである。イントロから聴こえるコンガのような音は、日野さんの素手による奏法によるもので、このアルバムの中では非常にユニークなアプローチとなっている。マイケル・カービンは2, 4拍のウラにタムのアクセントを入れたアフロ的なビートを叩いていて、日野さんのアプローチはその間を縫うパーカッション的なものとなっている。譜はテーマのサビの後の部分で、ハイハットとバス・ドラムが4分をキープしながら、スネアを中心に

ハンド・ドラミングを行なっている部分である。基本的にはミュート奏法で、ときどき♪に示したスラップのオープン・サウンドが入る。譜にある♪は半分オープンのようなサウンドである。マイケルの叩くパターンとの絡みが絶妙である。この曲では、この後日野さんもスティックで叩き始め、リズムのコンビネーションも激しくなっていくが、ハイハットを、日野さんがオモテ、マイケルがウラでキープしているのも面白いアプローチだ。



Ex-2 ミュート ミュート・アクセント



「トリップ」  
坂井紅介

**M① To Be To Be**

Music by Benisuke Sakai

このアルバムを最初を飾るのはヒップホップ調のリズム・アレンジが特徴的な「To Be To Be」である。この曲の核となるのは日野さんのリズムではないだろうか。このリズムは言ってみればニュー・ジャック・スウィングのジャズの解釈によるアプローチというか、ジャズの要素（インター

プレイ）がふんだんに盛り込まれたアシッド・ジャズのような感じである。Ex-3はテーマ後のブレイクでのドラムのリズム・ソロからピアノ・ソロのアタマにかけてのアプローチである。リムショットを使ったリズム・パターンからスネアの小さいフィルへの流れとグルーブ感が実に気持ち

ちいい。ソロのバックイングでも、最後の小節にあるようなハイハットを使った小ワザなどを随所に見せており、リズム・キープに徹するドラミングとは一味も二味も違っている。インタープレイを行ないながらも曲をグイグイ押していくようなグルーブ感が失われないのはさすがである。

Ex-3

**M② Habana Club**

Music by Benisuke Sakai

この曲は、わりとスローなバラードで、日野さんはブラシで叩いている。彼のアプローチは、速いテンポの4ビートではトニー・ウィリアムスのようなスピード感とシンコペーションを多用したドラミングを行なうが、このようなバラード系の曲で、特にブラシとなると一転してエルヴィン・ジョーンズのような、歌いまくり、ウネリまくるフィーリングを前面に押し出している。Ex-4はベース・ソロの後、4バース・チェンジの形になる部分でのプレイで、5小節目からがドラム・ソロである。4小節目まではシンバルの強いアクセントが特徴的で、強力なシンコペーションになっているが、ブラシでこれほど強くクラッシングす

るには、手首のスナップが強くないと無理であろう。ドラム・ソロの部分はエルヴィン・ジョーンズ・スタイルに近いフィーリングで、2小節目は

譜のようにダブル・ストロークを使ったアプローチであろう。また4小節目で徐々に音量を抑えてテーマにつなげるプレイも心にくい。

Ex-4

**M④ Salaam**

Music by Benisuke Sakai

この曲は6/8拍子のアフロ・キューバン・ビートを中心にしたリズムで、ドラム・パターンは2、4拍をハイハットでキープした3連のリズムにも聴こえるが、リズムの性格上ここでは6/8と解釈して採譜した。Ex-5④はサクソ・ソロのバックイングでのプレイで、3小節目まではライ

ドとタムのコンビネーションによるリズムの組み立てがわかると思う。テーマ部分では、スネアはリムショットになっていたが、ここでは普通に叩いている。4小節目はタムとバス・ドラムを絡めたフィルである。Ex-5⑤はその後に出てくるさらに激しいアプローチである。3、4小節目のフ

ィルはクラッシュのアクセントの間を2つのタムを同時に叩いて埋めていくアプローチで、その符割りには16分音符の5つ割りと4つ割りのコンビネーションになっている。6/8拍子の中で、複雑というか、かなり自由にアプローチしているのがわかると思う。



Ex-5 (A)

B

### M⑥ Trip

Music by Benisuke Sakai

この曲は速い4ビートの曲で、以前やっていたタイトルと同じ名前のグループのテーマ曲でもある。ここでも日野さんのプレイは、スピード感を持ち、絶妙にシンコペーションを駆使しながらソロイストを鼓舞している。非常に両手両足のバランスのよさを感じる。Ex-6は2人目のサックス・ソロのバックングの一部で、サックスのフレージ

ングに絡みつくようなプレイを行なっている。この感じは実際に聴いてもらわないとわからないと思うが、その反応の速さには驚かされる。特に9小節目以降がソロに反応している部分である。この曲ではアルバム中唯一ドラムのロング・ソロが入っているが、そのソロはフリーなスタイルで、ドラムを手で叩いたり、またダイナミクスがうま

くコントロールされた、日野さんの“歌”が堪能できる内容になっている。またこのソロでは、手で何かフレーズを叩いていても、常にハイハット、バスドラが生き物のように動いているのが特徴で、これはとても譜面にはできない自然発生的なフィーリングを持っている。またソロから4ビートのリズムに戻る瞬間が実にカッコいい。

Ex-6

### M⑧ Toile Paint

Music by Benisuke Sakai

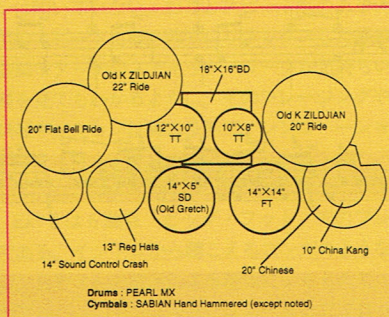
アルバムの最後はスロー・バラードで、まるで“おやすみなさい”と言われているようなしっとりとした曲。ここでは日野さんもブラシでしっとりサポートしている。Ex-7はサックス・ソロのバックングで、ブラシ・プレイのフレージング

の特徴がよく表れている部分である。譜例の♪の部分はスウィープ（こする動き）で基本的には左手が中心と考えていだろう。4小節目のフィルのようなハイハット、バス・ドラムを絡めた細かいフレージングも多用している。5小節目から

のアプローチは2拍3連で、クラッシュ、タム、スネア、バス・ドラムを叩く形で、通常ブラシではあまりやらないクリエイティブなアプローチと言っていだろう。そのフレーズの歌い方にも注目したい。

Ex-7

### TOKO'S NEW KIT



●カスタム・ペイントが施された日野氏（通称トコさん）のニュー・セット。スネア以外はすべてパールMX（6プライ・メイプル）で構成。バス・ドラムのタム・ホルダー・ベースの位置が通常よりもフロント・ヘッド寄りに付けられているのが特徴。またハイハット・スタンドのフェルトには、普通のシンバル・スタンドのフェルトが付けられている。

